

決闘を制したのは武蔵だが、彼は小次郎に止めを刺さなかった。井上氏は2人が6年後に再び出会ったら何が起こるだろうとうことを、詩的、風刺的、空想的で心のこもった表現で描いている。

世紀の決闘の夢の再戦を願うサムライ愛好家たちはガッカリするだろう。武蔵と小次郎は闘うつもりで登場するが、今年の4月に亡くなった、平和主義者の井上氏は、2人を和解させると決心している。

そのために、井上氏は舞台を人里離れた禅寺に設定し、2人の怒れる若者をそこへ行かせる。復讐心に取りつかれている小次郎に追われている武蔵は、3日間の静寂の修行に励むためにその寺にやってくる。数日間の滞在で武蔵は多くのことを学ぶのだが、観客にとってうれしいことに、様々な事件が起こる。

「ムサシ」の啓蒙への道は3時間と長いですが、驚くほど早く時間が過ぎる（日本語の台詞に英語の字幕）。この舞台の持つ心や構想を、簡潔なあらすじとして説明してしまうと、単なる心温まる単純な物語だと思われてしまうだろう。しかし、「ムサシ」は具体的な心理描写よりも、アーキタイプ（元型）を重視している、一歩先を行った寓話である。ムサシという主人公の運命の描き方は決して単純ではない。

ここで創り上げられたのは、繊細な几帳面さと力強いユーモアが合わさって作られた美しい会話。様々なジャンルを混ぜ合わせたシェイクスピア舞台の演出で有名な蜷川氏（彼の手がけた「近代能楽集」は5年前にリンカーン・センターで上演された）は折衷主義の巨匠である。能特有の儀式的なリズムと音を使用している「ムサシ」は、ある意味、伝統的な能舞台だと言える。しかし、「ムサシ」は堂々たる風格で、説教臭くならないようにつくられているので、そのユーモアは全く損なわれていない。たとえば、登場人物の1人は能中毒で、自分で創作した能をその場で披露せずにはいられないという設定だ。

初老の剣術家で将軍の政治顧問である柳生宗矩（吉田鋼太郎）は、僧侶、沢庵宗彭（六平直政）と新しい寺の住持、平心（大石継太）が主宰する寺開きへやってくる。その後、2人の女性後援者も参加。かつて踊子だった木屋まい（白石加代子）と若い筆屋乙女（鈴木杏）である。

これらの様々な魂が、ムサシと小次郎の運命に興味を抱く。そして、彼ら自身にもそれぞれ身の上話があり、その話し合い合戦で誰が勝利するかで熱くなっ